

# 巣立ち

堀辰雄

青空文庫



彼女は窓をあけた、さうすると、まるでさういふ彼女を待つてゐたかのやうに、小<sup>コツテエデ</sup>屋のすぐ傍らの大きな櫨<sup>もみ</sup>の木から、アカハラが一羽、うれしさうに啼きながら飛び下りてきて、その窓の下で餌をあさり出した。けさもまた霧雨がふつてゐるのである。もう七月だといふのに、さうやつて窓をあけてゐると、寒いくらゐだ……

はじめのうちはよく彼女は、その小鳥に何かやらうと思つて、いそいで食物の残りをもつてきてやつたが、それを投げると、小鳥はびつくりして逃げてしまつて、二度と近づかないのである。それでこの頃はもう、彼女は窓のところに手をかけたきり、草の

中に赤い胸をかくすやうにして、何をあさつてゐるのか、小鳥があちこち走りまはつてゐるままにさせて置くのである……

突然、その小鳥が何かにびつくりしたやうに、飛び去つた。氣がついてみると、彼女の背後に、いつのまにか彼が寢間着のまま突立つてゐるのだつた。

「なあんだ、おれが來ると、すぐいつてしまやあがる」彼はさう不平さうに言ひながら、軽い咳を二つ三つした。

「あなたは亂暴だから……」彼女はいそいで窓を閉めながら、しかしいたはるやうに彼に言ふのだつた。

かうしてすこし病身な彼を相手の、さうして彼の好きな森のなかでの——しかし彼女にとつては最初は淋しくないこともなかつ

た孤獨な生活にも、だいぶ馴れてきたこの頃である。さうしてその毎朝毎朝は、いつも大抵このやうにして始まるのである……

この山奥の村——去年彼と彼女とが其處ではじめて知り合つた——に二人が結婚して、一しよに暮らしにきたのは、もう一月ばかり前になる、六月のはじめだつた。丁度、アカシヤが花ざかりだつた。それから道ばたの藪は野茨の白い小さな花を簇がらせてゐた。數日、彼等はまだ誰あれも來てゐないその村ぢうを、二人で住むのにいいやうな小さな家を搜して歩いた。ちよつと好ささ

うなコツテエヂは、その持主を尋ねて見ると、みんな他人の別荘だつたりした。しまひにはがっかりして、もうその持主を訊かうともしないで、二人は住み心地のよささうなコツテエヂがあると、その前にいつまでも立ち止まつたまま、そこに自分たちが住まへたらどんなに楽しげに、幸福さうに見えるだらうと、そんな彼等自身の日常的な姿を空想したりしてゐた。自分たちのものにはないさうもない幸福そのもののやうな、他人のコツテエヂを前にしての、そんな空想はしかし二人を愉しませた。さうやつて毎日捜してゐてもなかなか氣に入つた家の見つからないことが、そんな道草を食ふ愉しみのために、それほど苦にもならなかつた位。：

數日後、彼と彼女とがそんな家捜しからまたしても空しく歸る

途すがら、オオチトリアム集會堂の裏に抜ける林道をまはつてくると、いま

まで兩側から灌木に挟まれながらSの字を描いてゐたその細い道  
が一軒のコツテエヂの前にひらけ、丁度その前でぐつとLのやう  
に曲つて、其處から橡の林の中にはひり込んでゐる。——その灌  
木の中から抜け出した瞬間、人々はいきなり目に入れるのだつた、  
先づ一めんに眞白な野茨の花の咲いてゐる生籬いけがきを、それからそ  
れに半ば埋まつてゐる一つの小さなコツテエヂを。それだけ、そ  
のコツテエヂと、その生籬の効果は甚だ顯著だつた。勿論、その  
コツテエヂはまだ人が住まず、閉されてゐた。

「おい、すこうしあのヴェランダで憩んで行かうぢやあないか？」

彼は快活さうに彼女をふりむいた。

「構はないかしら？」

「うん。いいだらう。それに、誰れも見てゐやあしないもの。」

彼はそのコツテエヅに毎年來てゐる若い外人夫婦とは顔馴染だつた。特にその北歐系らしい美しい細君の顔はいつでもはつきりと蘇らせられた。それだけに彼等の幸福の領分を荒らすやうでちよつと氣のひけたこともひけたが、そのまま其處を過ぎ去つてしまふにはあんまりすべてがその瞬間の自分達に似つかはしく、愉しさうだつた。そこでそんな顔馴染の住人達のことには彼女には噫おくびにも出さないで、彼はずんずんその家のなかにはひつていつて、すました顔をしてヴェランダに腰を下ろした。彼女はそのコツテエ



ヂのまはりを仔細に、と云ふよりかやや不安さうに見まはしてから、彼のそばに来て、竝んで腰を下ろした。そのヴェランダにさうやつてゐると、なるほど、まはりの生籬に隠れて、道の方からは殆ど彼等は見えさうもなかった。さうしてその無数の野茨の花のほひは、まるでその生籬自身が呼吸でもしてゐるやうに、彼等のまはりまでときどき匂つてきたり、又あるかないかになつて消えていつたりしてゐた。

「あら……」と彼女は、丁度彼等のまん前の、生籬の茂みの中をさつきから啼き聲も立てずにしきりに不安さうに枝移りしてゐる一羽の小鳥にそのときはじめて氣がついて、肩を竝べてゐる彼に指さした。「あの小鳥は何をしてゐるのでせうね。なんだかあの

野茨の中から出られなくなつちやつて、まごまごしてゐる見たいね。」

「本當だ」と彼もやつとその小鳥に氣がつき出した。葉がくれで、その上氣が狂つたやうに飛び移つてゐるので、さうよくその姿が見えず、その小鳥がどの位の大ききさだかすらもちつとも見當がつかなくなつたが、胸のところだけちらつと煉瓦のやうに薄赤いのだけが認められた。

そのうち、さうやつて二人して見てゐる前で、その小鳥はどうしたのか、その茂みから抜け出したやうな氣配もなく、突然姿を消してしまつたのだ。……

「あら、あんなところに鳥の巢が……」彼女はさう言ひかけたま

ま、少女らしく弾む心をおさへるやうにして、そつと腰を浮かせた。

「何處に？」彼は無精さうに腰を下ろしたまま、訊いた。こんなところに鳥の巢なんぞあつてたまるもんかと云つたやうな口吻である。

「ほら、あそこによ……あれが見えないの？ ……」いつのまにか立ち上つた彼女が、それを彼に教へるやうに、その生籬の方へ近づいて行かうとすると、何處かへ見えなくなつてゐたさつきの小鳥らしいものが、ついとまた姿を現はし、こんどは巧みにその生籬をくぐり抜けて、さつと飛び立つた。その飛び出したあとへ目をやると、なるほど鳥の巢ほどの黒い塊がある。

彼もそれを見ると、急に元氣よく立ち上がつていつたが、そこいらの茂みは相當深いので、鳥の巢が目とすれすれの高さ位にあるのに、さうしてその巢の中で雛鳥らしいものがびよびよ啼いてゐるのさへ彼等に聞えてくるのに、それがどうしても覗けないのである。何んとかして早くそれが見たいので、こんどは二人で林道まで出ていつて、反對の側からそれを搜してみると、それがつい鼻のさきに懸つてゐるのに、こんどは道がそこところだけ凹んでゐて、いくら背伸びをしてもやつぱり目が届かない。何しろ野茨だから、棘が一ぱいあるので、枝をたぐりよせることが容易に出来ないのである。そのとき彼はふいと手にしてゐた秦皮のステツキに氣がついて、それを持ち變へて、その握りのところにそ

の鳥の巢の懸つてゐる白い花の一ぱい咲いた枝ごとそつと引き寄せて、爪先き立つたら、やつとその巢の中がのぞけた。巢の中には、目ばかりぎよろつかせた、まだ羽の生えてゐない、へんに不恰好な雛たちが、四五羽塊りあつて、うごめいてゐた。さう、生れてからやつと四五日した位のものに見えた。——さつきの親鳥らしいものがそのとき急に彼の頭上の高い木の梢でけたたましく啼き出した。それに應ずるやうに、巢のなかでも雛たちが一層びよびよと啼き出したやうだつた。彼はなんだか自分が残酷なことをしてゐるやうな氣がして、もう覗くのを止めてステツキを弛めようとする、彼女がそれに代つて見たさうにしてゐるので、鳥の巢のある枝をひつかけたままそのステツキを彼女に手渡して、

自分はそつと其處を立退いた。

「まあ何んて氣味が悪いの……どんなに可愛いかと思つたら……」彼女も彼のしてゐたやうな恰好をして、爪先き立つて、その巢の中をのぞき込みながら、驚いたやうにさう言つた。

その間、彼は彼等の頭上を枝移りしながら、氣づかはしげに啼きつづけてゐる親鳥の姿を捕まへようとしきりに目で追つてゐたが、なかなかその正體は目には止まらなかつた。胸のあたりの煉瓦のやうな色だけがときをり、ちらつと認められたきりで……

彼等はそれからまた何といふこともなしに、再びヴェランダに戻つて、そこにさつきと同じやうに竝んで腰を下ろした。

本當にこのままかうして自分達が此處に住んでゐるのだつたら

！ この住み心地よささうなコツテエヂと云ひ、この花ざかりの生籬と云ひ、この小鳥の巢と云ひ……しかし、まあ、何んだつてこんな人の目を誘ひがちな、眞白な花を咲かせてゐる野茨の茂みの、しかも手を届かせようと思へばわけなく手の届くやうな枝を選んで、わざわざこの小鳥は巢なんぞをつくつたんだらう。莫迦だといへば莫迦だが、もしかそいつが何んにも知らないでこの藪に巢をつくつたのだとしたら、もう雛が孵<sup>かへ</sup>りさうになつたのと殆ど一しよにその藪に一めんに眞白な、好いにほひのする小さな花が咲き出したのに、まあどんなにそいつは面喰つたことだらうと、何んだかそのかうやつて自分達をいま愉しませてくれてゐるやうな失策をやつたその小鳥がいぢらしいやうな氣もした。——さつ

きまであんなに氣の狂つたやうに啼き立ててゐたその小鳥の奴は、彼等がその巢の傍を離れると、もうけろりとしたやうに、再びその生籬に戻つてきて、花や葉のなかを何かせはしさうに、いくぶんまだ不安さうに枝移りしてゐる。

何處からか自轉車の音が近づいてきた。前方の、兩側から生ひ茂つて道の上方にトンネルをつくつてゐる灌木の中から、首をこごめるやうにしながら、自轉車に乗つた御用聞きが飛び出してきて、そのコツテエヂの前を急力アブしながら、その花ざかりの生籬にも、その花かげにゐる彼と彼女とにも、それから勿論その小鳥の巢にも、氣がつかないやうに通り過ぎていった。

「こんなところに巢があるなんて、却つて誰も氣がつかないのか



も知れないわね……」彼女はそれを見て、すこし安堵したやうにさう言つた。

「……………」彼はどうか分るもんかと云つたやうな顔を、意地わるさうにわざとして見せるのである。

それから暫くしてから、こんどは反對の、オオチトリアム集會堂の方から、

——年とつた外人夫婦が腕を組み合つて、しかしお互に上體を眞直にしたまま、とつと歩きながらそのコツテエヂの前を通り過ぎて灌木の中に消えていつた。何か快活さうに口笛をふいてゐた御亭主の方だけ、通りすがりにちらりと花の生籬の方へ目を注いでいつたが、一向私達にも、その小鳥の巢にも氣づいた風はなかつた。……

突然、彼は夢から醒めでもしたやうに立ち上つた。さうして

「さあ、もう歸らう」と言つた。

彼女も素直に立ち上りながら、しかしまだ夢に半ば浸つてゐるやうな聲で「このままそつとして置いて、毎日見に來ませうね……私達のほかには誰もきつと氣がついてゐないから……」と囁いた。

「どうだか分るもんか……」彼はそんな場合のいつもの癖で、少しづつきら棒に言つて、それでも道に出てから、もう一度その鳥の巢を通行人の目につき易いかどうか調べて見るかのやうに見透かすやうにしてゐたが、もうさうしてゐても切りがないといったやうに、ステツキを振りながらさつさと歩き出した。

その翌日、やつと借してもらへるといふ、まあどうやら彼の氣に入つたコツテエヂが見つかった。だいぶ山の上なので、少し不便で、淋し過ぎると彼女は思つたが、數本の大きな樅の木を背負つた、何處から何處まで木の皮葺きの、いかにも山小屋然とした造りが大へん彼の氣に入つたらしいので、また自分の方の都合は讓歩して、そのコツテエヂを借りることに同意した。それから早速、荷物をほどこいたり何かして、相手の彼が病身なので、何もかも大抵彼女が一人でやらなければならず、さうなるともうきのふ

の小鳥の巢どころではなかつた。夕方、やつと片づいた頃から、あいにく夕立氣味の雨になり出した。

明くる日も、そのまた明くる日も、どしや降りだつた。せつかく二人きりの愉しかるべき生活をはじめようとしてゐる矢先に、これでは、まだその住みつかないのでどこか空家みたいな感じのする小<sup>コツテエヂ</sup>屋の中をあつちへ行つたりこつちへ來たりしながら、佗びしく閉ぢ籠つてゐるよりしやうがなかつた。ときどきひよつくり小鳥の巢のことを思ひ出して、この雨にどうなつたらうと二

人で氣遣はしさうに話しあひはしたものの、病身の彼には、この雨を冒してまでそれを見にゆくほどの氣にはなれなかつた。――

をかしなことには、この小屋の傍らの大きな樅の木には、始終、いろんな小鳥がやつてくるのに、そんなものは彼には眼中にないらしく、まるであの野茨のなかに巢喰つた見知らない小鳥の他は小鳥なんぞのあることを忘れてしまつたやうに、やあカケスが來やあがつたな、いつも Jay, Jay と云つてやがつて煩さい野郎だ、

――あの莫迦な啄木鳥きつつきの奴め、ああやつて樅のてつぺんまで攀ち登つてゆく氣なのかしら、といった冷淡な調子で、彼はそれらの小鳥をちらりと見やるきりだつた。

やつと雨が晴れ間を見せ出したので、足りない世帶道具や食糧

品を求めがてら、二人で蝙蝠傘を用心にもつて小屋を下りていった。

村で買物をすませてから、彼等は靴屋によつて、途中でぶつりと切れた彼の靴の紐をとりかへて貰つた。

その古ぼけた靴屋の店の奥には、鳥籠が一つぶらさがつてゐた。何んといふ小鳥だか知らないが、胸に黄いろいチョツキを着込んだ奴が、きよとんとして彼等を見下ろしてゐた。いつも鼻のさきに老眼鏡をかけてゐる靴屋の主人が出てきたとき、彼は急にこの男がこの村切つての小鳥通だといふ話を思ひ出した。その主人が彼の靴の紐をつけかへてくれてゐる間、彼はそんな事をきくのを羞かしさうに、

オオチトリアム

「こなひだあの集會堂の裏のところで、小鳥の巢を見つけたんだけれどね。花のさいた野茨の茂みの中で、もう五六羽雛に孵かへつてゐたんだがね、——あんなところに巢をこしらへるのは何かしら?——」

「どんな鳥でしたな?」靴屋は何を言ふかといった顔をして、眼鏡ぐごしにぢろりと彼の方を見た。

「胸にちよつと赤みのあるね、羽はさあ? ……」彼はすこし上づつたやうに彼女の方へふりかへつた。「おい、ありあ鳶色だつたかなあ?」

彼女も説明に困つて、ただ氣まり悪さうに首をかしげてゐるきりだつた。

「アカハラかなんかでせう」靴屋はあんまり興味もなささうに答へた。

「アカハラなら僕も知つてゐるけれど、どうもアカハラぢやなかつたなあ」

「そんなところに巢をつくるのはアカハラ位なものですよ」と靴屋は彼を軽く一蹴した。自分の小鳥の觀察の仕方の出たらめだつたのに、われながら呆れ返つてゐた矢先だつたので、それに文句の言ひやうもなかつた。彼はもう靴屋の説に抗はないことにした。靴屋を出しなに、ふとそこにぶらさがつてゐる鳥籠に氣がついて、彼は、

「その小鳥は何ですか？」と訊いた。



「これはキビタキです」靴屋はその鳥籠へ目をやると、もう彼等の方をふりむきもしないで、いかにも優しい目つきになつてその小鳥を眺め出した。まあ、何んて變つた、しかし小氣味のいいおやぢなんだらう、と彼は思ひながら、彼女を先に立てて、その靴屋を出た。

それからどちらから言ひ出すともなしに郵便局の角を曲つて、  
 朴ほほの花のさいた集オオヂトリアム會堂の前を横切りながら、例の小鳥の巢のあるコツテエヂの方へ、彼と彼女はこんな會話をしいしい向つていつた。

「あの靴屋は何あに？　ずるぶん無愛想な奴ね。」

「うん。……だが、ああなると、もうあれはあれなりに風格があ

つて、なかなか好いちやないか。小鳥のことなんぞ、おれ達みたいな奴に何が分るもんかつて、云つた顔をしてゐる。それはさうだとも。又、あのときのおれの説明の仕方つたら、なつちやゐなかつたからなあ……」

「まあ、あなたつたら、あんなに言はれても憤慨なさらないの？……随分人が好いわね……」彼女にはさういふ人の好い彼がいかに焦れつたさうに見える。しかし實をいふと、彼が何處までも本氣でさういふことを彼女に言つてゐるのか、彼女を揶揄つてゐるのぢやないのか、よく分らないので、その方が本當は心細いのである。

彼は彼で、彼女がさういふ考への中に沈み出したのをいい事に

して、あれはやつぱりアカハラだつたらうかと心のうちでとつお  
いつしながら、片手に二人分の巴旦杏はたんきやうをかかへ、片手にいつも  
のステッキの代りに蝙蝠傘を突きながら、とつととそのコツエ  
ヂの方へ歩いてゐた。やつと向うにその生籬が見え出したのであ  
る。

もう雨のためにあらかた花の散つてしまつてゐるその野茨の茂  
みの中に、しかし例の小鳥の巢はそのままそつくりしてゐた。あ  
れから五六日経つてゐるのだし、あんなにひどい雨だつたので、  
どうなつてゐるだらうと思つて、その鳥の巢の懸つてゐる枝ごと  
こんどは蝙蝠傘の手でたぐりよせて見ると、先づ、聞き覚えのあ  
る雛たちの啼き聲がきこえ、それからもうすつかり羽の生え揃つ

た、嘴ばかり大きい、胸の煉瓦のやうに赤らんだ雛たちが、五六羽まだその巢のなかにどれがどれやら見分けのつかないやうに一塊りになつてゐるのが認められた。けふは親鳥は何處へいつてゐるのやら、近くに影も形も見えなかつた。

こなひだは、あんなに見事に咲いてゐた野茨の花は、その元氣のいい雛たちとは打つて變つて、雨に打たれてすっかり萎れ切つて、もう残りの匂さへさせてゐなかつた。この前竝んで腰かけてゐたヴェランダも雨ですっかり汚れてゐた。それでも彼等はそれに近づいていつて、何とはなしにそのヴェランダに立つて見た。そのとき不意と、この前彼等の目のまへの茂みの中をあつちこつち枝移りしてゐた小鳥の影がちらつと彼の記憶から蘇つた。……

「やつぱりアカハラかも知れないや……」彼はやつと納得した。

アカハラなら、この村にはたくさん棲んでゐて、一向珍しくもない小鳥だ。むしろ、秋などになると、二三羽——十二三羽と群をなして、よく人家近くなどに餌をあさりに來てゐる、慣れ慣れしいくらゐの小鳥。きよとんとした顔をして、その小鳥に近づく人間なんぞを見上げる目つきがどうも彼はあんまり好きぢやなかつたのである。その花のさいた茂みの中に巣をつくつた小鳥がもつと珍しい種類のものであることを欲した氣もちが、その鳥の巣を知らず識らず彼に見誤らせてゐたものと見える。

「アカハラの巣ぢやあ、いくら見つけられたつて、誰も持つて行きやしないや」と彼は自ら嘲けるやうに言つた。

アカハラだつて好いわと彼女は、自分の見つけた鳥の巣の中から漸く巣立つて行かうとしてゐるその小鳥たちを何としても可愛がつてやりたかつた。それにアカハラといふ小鳥の名が、彼女に Red-Breast といふ英吉利の俗謡などによく唄はれてゐる可愛らしい小鳥を何となく聯想させて好ましかつた。あれは確かロビンの一種だが、これだつてことによるとその英吉利の有名な小鳥の一種かも知れない。そんなことは彼だつて、あの高慢な靴屋だつて、知らないから、ただこの村にざらにゐるといふだけで、莫迦にしてゐるにちがひない。よし、自分は自分なりにこの小鳥たちを可愛がつてやるからいい……そんな事を夢中に考へ考へ、彼女は彼の速くなつたり弛くなつたりする氣まぐれな歩調に合はせにくさ

うに、歩いてゐた。

しかし、さういふ彼女にとつて不幸なことには、急に彼の父が病氣になつて二人とも彼の故郷によびよせられたのである。それがどうやら小康を得たので、再びその村に戻つてきたのはもう六月も末になつてからだつた。そしてその小鳥の巢のことなんぞは——少くとも彼はもう忘れるともなく忘れてゐた。

今年はよくよく雨の多い年だと見える。その村を彼等がしばらく留守にしてゐた間も、かなり雨がふりつづいてゐたと見え、彼等のコツテエヂから村へ下りる山道などはよほど注意しないと歩けないくらゐ凸凹がひどくなつてゐて、林の中などは木の枝がいくつとなく折れ、青い葉が生ま生まして一めんに散つてゐるのである。——雨上りの或朝、彼等が散歩のためにさういふ慘とした山道を村へ下りて行かうとすると、彼等の行手に一羽の小鳥が、足でも傷ついたのか、人間の近づいてくるのに一層あわてて、しかし飛び立てずに、ぴよこんぴよこんと跳んでゐるのだつた。アカハラだなどと思つて、彼がいつになく元氣になつて追つてゆくと、



彼自身がびつくりしたほど、難なくそいつが捕まつてしまった。見ると、それは何んと巢立つたばかりらしいアカハラの雛鳥だった！ さういへば、さつきから彼等の頭上を遠のいたり近づいたりしながら、梢でけたたましく啼いてゐる鳥がゐたが、それがその親鳥で、さうやつて自分の手もとを勝手に離れていった雛鳥を氣づかつてゐたのである。

彼は兩手の中に、不思議な、何とも云ひやうのない、火のやうな熱さを感じながら、その仔鳥をおさへてゐた。さうして彼女に近づいていつて、その手を細目にあげながら、それを見せてやつた。小さなアカハラは、この前巢の中で見たのとそっくりな鋭い嘴を大きくあけて、あるたけの聲を出して泣きわめいてゐた。

「捕つていつてしまはうか？」彼はひさしぶりで生き生きと顔を赫やかせながら、彼女の方を見た。

「さうね……」彼女はちらつと彼の手の中のアカハラを見たとき、こりあひよつとするとあの彼等の見つけた巢から巢立つた一羽かも知れないと思つた。若しかあれだつたら——「……でも、なんだか可哀さうね……」と言ひながら、あんまり泣きわめいたので、もう聲が出ないのに、まだ嘴を大きくあけたまま、はあはあ云つてゐる小鳥を、痛ましさうに見つめてゐた。

彼はちよつとその小鳥は足でも折つてゐるのぢやないかと思つて調べて見たが、そんなことは彼にはよく分らなかつた。そのときひよいと彼は小鳥好きな靴屋の事を思ひ出した。さう、あのお

やぢの云ふとほり、おれなんぞは小鳥を飼ふやうな柄ぢやなささうだと急にそれと同時に氣がついて、彼はその小鳥をすぐ放してやらうと、彼女にはただ目だけ合圖をした。さうして親鳥の手に返してやらうと思つてそれを搜したが、その鋭い啼聲は彼の頭上にあちらこちら移りながら聞えてゐても、その姿は木の葉がくれになつて見出されなかつた。そこで彼はやむを得ず、或閉された別莊の裏の方へまはつていつて、草むらの中へそつと放してやつた。小鳥はちよつと羽搏きをして飛ぼうとしかけたが、すぐ草の上に落ちてしまつた。さうしてもう飛ぶのはあきらめたやうに、親鳥の啼いてゐる方をたよりによろめくやうに走りながら、草むらの中に消えて行つた。……

どこからか親鳥の聲がずっと近づいてきたらしいので、兩方の姿は見えなかつたが、彼等はまあ好かつたといふやうな顔をし合つて、そこを立ち去り、村の方へ向ひ出した。

みちみち、彼はふと思ひ出した靴屋の小鳥好きな話を彼女にし  
て聞かせた。數年前、その靴屋は鳥籠の中に一羽のかはいらしい  
ヒガラを飼つてゐた。そのヒガラは、どうしたのか片脚に燐寸の  
棒を結はへつけられてゐた。人がそれはどういふわけかと訊くと、  
その小鳥は雛のとき片脚を折つてしまつたのだつた。それで、靴  
屋はその小鳥にそんな義足をつけてやつてゐたのだつた……

「まあ、あんなおやぢの癖にずるぶん可愛らしいことをしてやる  
のね。」彼女は少々その靴屋に好意をもち出しながら、その話を

聞いてゐた。

「そりあ、小鳥が好きならその位の事は思ひつくさ……」それから彼はいままでそんな事を一度もしたことがないのに、急に彼女の手をとつて、それを自分の両手でおさへた。「ほら、いつも冷たい僕の手がけふはこんなに温かいよ。どうしてだか分る？」

「……………」彼女は黙つてうなづいた。さうして自分の手をいつまでも彼の手の中に任せながら、そのいつにない温か味の中に、さつきの小鳥が残していった生命の燃焼のほとぼりらしいものを、何とも云へずうれしく感じてゐた。

この頃、彼等のコツテエヂに毎朝のやうにやつてくる一羽のアカハラがある。彼等にはそれがどうしても彼の逃がしてやつたアカハラのやうな氣がして可愛がつてやつてゐる。名前も、普通のアカハラといふのは止して、英語でレッド・ブレストと愛稱してやつてゐる。

しかし、なかなか野蠻な奴だ。或朝なんぞ、彼女が窓からそのレッド・ブレストの餌をあさつてゐるのを見ると、何か細長いものを嘴に啣へて、それをしきりに一息に嚙み込まうとしてゐた。この頃よく庭に落ちてゐる栗の花かなんぞだらうと思つてゐたら、それは、一ぴきの蚯蚓だつた。彼女が思はず兩手で目を掩つてゐ

ると、いつのまにか彼女の背後に突立つてゐた彼が、さういふ彼女の肩に手をかけながら、そつと彼女の耳に口をよせて、

「これが人生といふものさ……」とやさしく囁くのだつた。





# 青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第二卷」筑摩書房

1982（昭和57）年6月30日初版第1刷発行

初出：「新女苑 第三卷第一号」

1939（昭和14）年1月号

※初出時の表題は「短篇小説」です。

入力：tatsuki

校正：杉浦鳥見

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 巣立ち

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>